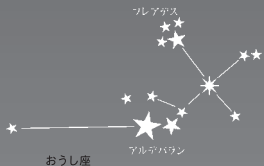
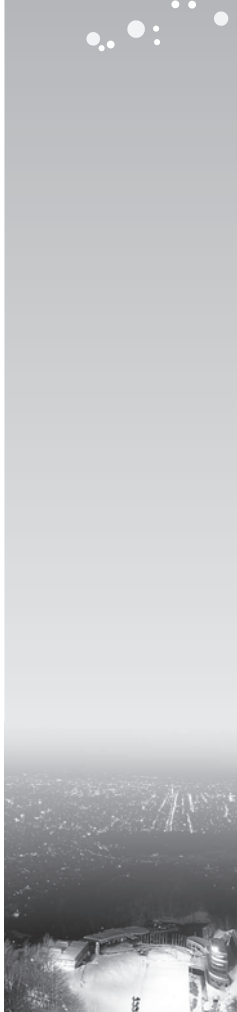


ポラリスを仰ぐ北の大地から



北極星

こくま座



新型コロナ感染症とその後

日高医師会 会長 小松 幹志

世界的にパンデミックを引き起こした新型コロナウイルス感染症（以下新型コロナ）も今年5月に5類へ移行されたが、いわゆるコロナ禍の間には、多くの感染者や死者が発生し、医療機関や各施設等は、新型コロナによって多くの課題に直面することになった。

新型コロナが猛威を振るい始めた頃、日高圏域においては、新型コロナ陽性者を受け入れられる宿泊療養施設はなく、感染症患者を受け入れられる医療機関とベッド数も限られていたため、苦小牧や札幌まで搬送せざるを得なかったことは非常に心苦しかった。

日高圏域でも新型コロナ陽性患者への必要な医療を提供するため、当院では、閉鎖していた老健施設を中等症の新型コロナ陽性患者の入院を受け入れる病室へと改装し、必要な医療機器の導入を行った。また、管内の医療機関が新型コロナの感染情報を共有し、管内感染者数と入院患者情報の共有を連日行い、できる限り管内で新型コロナ陽性患者の対応を行うように心がけてきた。

しかし当院も含め管内の医療機関や福祉施設内でのクラスター発生により、診療等の制限を行う決断も迫られ、医療介護サービスの低下も危惧されたが、保健所の指導の下、早期にクラスターが解除されたのは各施設の努力の賜物であったことは間違いない。

新型コロナが5類に移行してからは、徐々に制限も解除され、世の中では様々なイベントが開催されるようになった。医療機関や介護施設でも徐々に面会制限が緩和されるようになり患者さんやご家族の方々が大変喜んで見ると何かほっとしたような感じになった。さらに夏祭りや花火大会などが開催され多くの人々が訪れるようになり、馬の競り市では売り上げが過去最高額となり活気が戻ってきているようだ。

私が主催している野外音楽祭も2年間休止となったが昨年再開し9年目となる今年は多くの観客も来場し、最後にTULIPの姫野達也さんにも久しぶりに参加していただき「心の旅」を大合唱して最高の締めくくりができた。来年10年目は一区切りとして、さらに大きなイベントにしたいと思っている。

ただ新型コロナの感染自体は決して減っているわけではなく、むしろ感染者は増加している。最近では熱中症疑いで救急搬入された患者の中にも新型コロナ陽性者が認められ、また新型コロナ以外の感染症（ヘルパンギーナ等）も増えていて、今年度初めてインフルエンザ感染者も確認されている。

これからはワクチンの普及や治療薬が出てきたことで、決して恐れる感染症ではなくなってきたのかも知れないが、決して侮ることなく、迅速に対応できるように常に管内医療機関との情報共有を行いながら診療を進めていきたい。

杞憂であれば

三笠市医師会 会長 石黒 敏史

今後の人生そう長くはない、とは言っても、そう短くもないが、できることなら悲観的なことは考えず、暢気に楽しく、健康で過ごせれば（欲張りすぎか）と思っているのだが、昨今の世の中の情勢を鑑みると、そうは言っていられぬ気配が、ひたひたと身近に迫ってきているようだ。

今日まで人々は、その地域ごと、さまざまな環境の中、ある局面だけが突出するようなことをせずバランスのとれた生産活動によって豊かな大地を維持し、それなり平和に暮らしてきた。しかしながら為政者によるアグリビジネスへの土地譲渡、国民の望まぬ開発等により豊かな大地は失われ、飢饉や環境変化などのために多くの人々が亡くなったり不幸に見舞われている。低開発国で多く見られた話ではある。国民のレベルが低かったからその程度の為政者を選んだ、だから仕方がない。と言い切るのは酷である。一方、先進国では国民のレベルが高いので、そのようなことはないのか？と問へばそうとは言いきれまい、利権や欲得が複雑に絡み、善意の人々の思いや考えを、あたかも国民大多数の意志であるかの如くまとめ上げ、歯止めの効かない？「便利、簡単、快適」を追求しつづけ、そう努力することは、進歩であり人として当然の願いであるかの如く喧伝してきたマスメディアには、為政者共々大きな責任がある。文化的になる、幸せになる、を求めることは悪いことではない。しかし未来の人々のことを深く考えることなく、現世の刹那的豊かさに身を任せて、自分は大丈夫、まだまだ先のことさ、と思っているようでは、他人事のように思える不幸が身近で生じ、目の前に墓標もどンドン建つことになるだろう。できれば何とか少ない墓標で済ませられないものか、間に合わないか、手遅れなのか。いずれにしろどのような結果になろうとも、欲に歯止めがかからない人類のしてきたこと故、因果応報、仕方のないことと諦めるしかないのか、杞憂であつてくれたらな～。